

お茶の時間

ラグビー・ワールドカップ

廣瀬 誠 陸自73

スポーツを見て、これほど心を動かされたのは、久しぶりだ。チーム・ジャパンは、史上初めて決勝リーグに進んだ。残念ながら、準々決勝で強豪南アフリカに敗れたが、見事な戦いぶりであつたと思う。

今回のワールドカップを通じて、いろいろなことを感じる事が出来た。まず、ラグビーというスポーツの魅力だ。日本チームの戦いぶりは、多くの日本人を感動させた。それは、観客の表情やニュースに対するコメント欄を見れば、よくわかる。今まで日本でサッカー等に比べてそれほど人気が高かつたとは思えないラグビー。なぜ、それほど人々を感動させるのだろうか。

選手の懸命な姿は、それだけで魅入られる。先ず新鮮に感じたのは、テレビなどでは久々に聞く、「勇氣」「規律」「献身」等の言葉だつた。わが国では、「優しさ」や「思いやり」については、聞く機会が多く、なるほど日本人の美德だと思つていたが、いわば「共同行動」に必要な徳性である、これらの「勇氣」「規律」「献身」という言葉を多く

聞いたのはちょっとした驚きだつた。これらの言葉も、私達日本人が長く美德としてきたものだと思つて思う。うん、そうだったという顔きである。

また、ノーサイドという精神も、わが国の武道のように対戦相手に対する相互の敬意と試合終了後のきつぱりとした切り替えの気持ちよさが印象的で好感が持てた。

ラグビーでは、「ワン・フォア・オール、オール・フォア・ワン」と言われる。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という意味らしい。そう聞いて、昔、堺屋太一氏の本にあつた、機能体組織と共同体組織の話を出した。その視点で見れば、ラグビーは、得点を取つて勝利するという目的を追求する機能体組織であるとともに、その目的の達成それ自体が全員の幸福につながるという共同体組織という二つの面を鮮やかに持つていることに気がついた。勝つために、献身と勇氣と規律が求められるのは、戦いに徹した組織であれば当然だろう。振り返つてみると、最近のわが国にみられるのは、いわゆるブラック企業のように組織目的である利益の追求のみに汲々としてゐるか、構成員の間の波風を避けるために組織目的の追求自体がおろそかなり馴れ合いに陥るケースが多いように感じる。機能体組織にも共同体組織

にも、それぞれの利点と欠点がある。そのバランスを取ることが大事なのだと思う。その点、ラグビー競技は見事にその均衡がとれていると感じる。

本来、ラグビーという競技は、日本人の基底にある生き方に相性がよいのではないだろうか。かつての日本の社会は、今よりもずっと共同体的な色彩が強かつたように思う。会社組織も、共同体組織と機能体組織の両面が融合してうまく機能していたように思う。日本人の多くがラグビーの試合に感動するのは、その辺にルーツがあるのかも知れない。

筆者は、今回のラグビー・ワールドカップを観戦し、俄ラグビーファンの一人として、今後のわが国ラグビーの発展を心から期待している。

